

序

むし梵燈庵之阿茶席とくして人びおろりそ
うへは多田世と云ふ茶向小舟をソノの燈れ
きめと強々しんと生死観念の實情をり
祈り出せば一向ハ万世の耳目をおとろりし
今と燈の文とを尋ねしして小跡末社の祓と
祠まうこれと求會ふものハ一向一章ありて
おろるる記とのハ無常迅速なりとくし

友小房我本然子始号雪暇を亭の岳のいとゆ
 なさうらも風詠のねとぬ津家乃奥旨は
 定一寐て八月言の細とたより寤てと
 きりしとを跋とたよるふしや俳と俳と
 去此不遠の境ととりて市中の一困人と縁を
 相実なる事ハ蕉門の去来とあはくおそくは
 一と世之師更登翁とた下くた候とかきくは
 十六篇芭蕉翁述作以撰ひ詠とていへる小
巻白葉方

きゆいおとむと吾門の十老七哲と吟ま
 家堂とたよるは俳又ありはれ嗚呼とれ
 小和とてきあり事となりて去年の秋月
 芭蕉龍高と忌月以かひりて終ととり
 きゆいおとむと縁との思ひ思議するは
 孝子振筆子先人の詠を改て雪暇舎本然と
 改名して病氣病床の吟と拾ひ又親と
 同門知己のくくり贈まお追悼詠紙一帖

予とまのにき煙のりく小片をくひて盡魂此
微笑小体んとなり象風雅と二世のらまにりまは
そあつまーと序してあつふり

雪中菴

明和六己丑年之月

藤太



病中遺行



亡人

本然

芥摘や露もあふく吾手に
七ととや大工童のやうーき
おれ子小餅をくめばハ母ならや
一畝のうーさとえんや風をけ
灰小をこちやーの利ふあくるか
名日やうーらふうふ水おーへ

後引

菊の香はこぼれて花の香もあふ

林を月を詠訪ふ能を

の里や枯野の行あしり

裏なる人の許へつうり

極さきとあつらふれぬ紫うね

旦井子一園

基は内とまのなりきり

吾はけてびうひあふりや竹のう

下りて竹の影寐や雲れ吾

幸内三雲

餅こみや支那味系うそら

歳暮の吟

赤 鷲 遊 灘 廻

大十三章ハ病床の及右の中ニ強うを
拾うるのまゝ小ちうす

病成

解世のつとめをうけて寸志と成

三千日照常仰影

七十年空忽還源

清来定や心身をくしる阿弥陀仏

追悼歌仙并小序

祖翁一周忌の了後法師嵐音

寺人の裾をつまみ納豆をくまむ

有し又七文本納豆をたき忘に

納豆の苞を所んで煮もくねとく

くいた飯をまけりん空く今午

十月むらむらむの花をゆきけむれ

雲の夕日氣く忽是源の一向とふ

漆の朽葉と象袖と結しぬれ古くの

志まやう祿ハ初吉の祿と設る替

吾叟と兼舎と折して

振筆改

納豆や苞もくくこれかき夜

本然

じしかり小松とくま月

整太

山鳥山道くはく畑荒下

全

人足福の貝に遠く

然

有向く菊さく舎葺の紋不

全

扇も空にいと下中とハ

太

ウ

柄經乃汗を服丁の御母ころ

太

亥梅くさ木り折ふくを

然

鳴川と清きぬ也結持つるへ

太

己とと紙子の意の修り若

然

踏もおしふゆぬも言れな意あふん

太

沙灯くろくに舞のより鴉

然

来信ふりも骨更棚、茶こりく

太

旅志芝居の馬ハあましも

然



裸たむらさきぬ凡呂れまこと

太

らりて結さく花のうら

然

日細くみよ曲みれまはれ

太

いこもまのさ何肥お前

然

かきまぬさ一平措のさえみ

全

使若も脈たし昔ふおは

太

掌へまいこるたさのこそれ

然

ころふ所も尻後ハ三千

太

索麩も是さりりやあは音

然

喉りあそと竹婦人なり

太

指動さくく寝の列女傳

然

忠度町の荒てなをく

太

まよゆぬ初尾さ師の系ゆ

然

け奏敵と翌日れ和の月

太

樂老沈むるにさく寸

然

さく一志より喜い玉片一田

太



ナラ

耳らまぬ本草ありと連えて

太

ふまきの市れ足をとく一歌

然

閑のすもゆき帯目のまきこく

全

鳩も片しるも照日曇る日

太

年こくたきむけの花乃相似たり

今

あまも渾古比むくすの藝

執筆

至元居士追悼

海直云二縁山々世世さして

追出の遠れあまのり、啼ちたり

た優

山茶も乃之候、つた答へれ

恭桂

あゝ惜や霜く打ふる水仙也

方樹

休やふと小まのうを 産

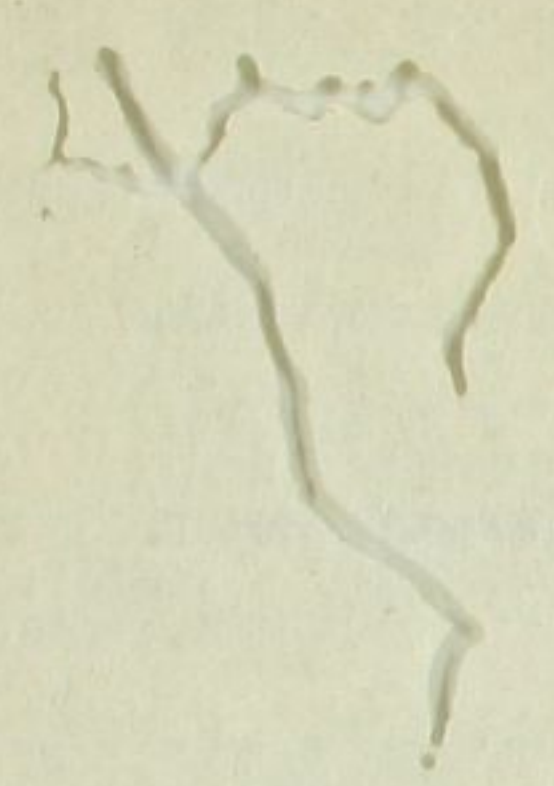
眠我

き菊やあまを合はれきむけ系

夷角

極楽へちぶや老木のうへに花

弄蝶





あゝ雲や夕の侍のうへに花
極楽のうへに今や夕を牡丹
ひきよめて夕の侍のうへに花

如風
山幸
求光

遙か〜と夕の侍のうへに花

嵐亭

相争も昔より夕の侍のうへに花

人た

そ人との夕の侍のうへに花

雷堂

あゝ〜と夕の侍のうへに花

吐月

あゝ夕の侍のうへに花

六窓

友を〜と夕の侍のうへに花

葵太

神戸



播磨西郡龍野

廣中